

「内部」へのまなざし—その彼方には

山上 千鶴子

タヴィストック(ロンドン)でクライン派の訓練を終えて帰国したのが1979年秋であるが、それ以降私は或る探しものに心を傾けた。ご承知のように、クライン派精神分析というのは徹底して「内的現実 inner reality」重視である。彼の地で培われ身に付けた‘心の内部空間’への感覚をどう日本語に根付かせてゆくのか途方に暮れていた。そこで、‘心の深淵’に潜って日本語を駆使しうる表現者たちとの連携を希求した。これとおぼしきものを次々と興の赴くままに読み漁った。小説家(例えば中村真一郎)、文芸評論家(例えば秋山駿)、そしてたくさんの詩人たち。大いに刺激され、やがて心理臨床の場で自分の使う日本語の「精神分析的言語」に信頼を取り戻していった。この折にジュール・シュペルヴィエルとの邂逅がある。彼のフランス語の詩は堀口大學の流麗にして難解なる日本語で翻訳されていた。まるで異空間への遊泳に誘われるような…。痛く魅了された。私の敬愛する明治生まれの女流詩人・永瀬清子もそうだが、或時期日本の詩人たちは堀口大學訳のシュペルヴィエルに深く傾倒した。‘内部へのまなざし’に依拠する「新しき詩的言語」に励起させられて…。

ところで、われわれは誰しも<ああ、あなたに会えて良かった…！>と熱烈に思うことがあろう。ところが、その思いがいつしか忘却されてしまう。そして時を経て、何かの拍子にふいとその記憶に立ち還ることがある。ひょんなことで今やシュペルヴィエルの詩の一篇が甦った。ここにそれをご紹介します。

或る詩人

いつも独りで自分の深間に下りて行くとは限らない
生きた人間を一人ならず連れて行くことだってある。
僕の寒冷な洞窟へついて来る人たちに
たとえ一瞬でもそこから抜け出せる自信のありや？
僕は自分の暗夜の中に、沈没する船のように、
船客も乗組員もごたませに、積み重ねる、
そして目の前で、船室の^{あかり}燈火を消す、
深所の友を僕はつくる。

(シュペルヴィエル詩集 堀口大學訳 彌生書房 1972)

シュペルヴィエルは、その誕生後わずか数ヶ月で両親を不慮の事故(中毒死)で亡くしている。この‘悲傷の魂’ともいうべき詩人は、その生涯をととして「同伴者」を求めたもののように私には思われる。上記の詩もそうだが、それを懇望するころの熾烈さが胸を打つ。また、その果敢さには圧倒される。分析家としての私には、この‘果敢さ’が不足しているとの自覚があった。徹底して分析患者に自分を付き合わせる自信も樂觀も持ち合わせがない。彼のようにそのころの深底にまで誰彼を引きずり込むほど、精神分析についての‘信’がないともいえた。精神分析というのは用のない人には用のないも

のだと内心思っていたのだから・・・だから臨床家として自らのスタンスを「無理もしないし、無理もさせない」というのを鉄則にして、どなたとも関わってきたのであった。それで分析家としての己の不徹底さを恨めしく思っても、如何せん、これが現実だと観念していた。腰の引けた‘おっかなびっくり’に幾分冷やかさを忍ばせながら・・・。

ところが、ようやくここに至って私は臨床の場で‘付き合うこと・付き合わせること’に俄然前向きになろうとしている。このシュペルヴィエルの詩が改めて意味を持ったのには理由がある。

つい最近のこと、私は「日本精神分析学会」の大会・抄録集のページを繰っていた。そこには、私の許に教育分析(パーソナル・アナリシス)を受けに通われておいでの方が何人か症例発表するようで、それぞれの抄録が掲載されてあった。読み進むうち私は驚愕した。彼(ら)とクライアント、似ているのだ！ まるっきり‘ダブル(生き写し)’ではないか！ そこではいつも私との分析セッションで彼(ら)がワークスルーを試みていること、すなわちその未解決な内的葛藤が患者を相手にしながら相互転換されている。どうやら私との関わりが彼(ら)の臨床の場に直結している。

私は大いに‘不思議’を覚えた。それぞれが私との分析セッションにおいて己の「内なる躓き」と格闘する。語りかけられ、己自身が見られる・聞かれる・知られる。さらにはセラピストとしてクライアントとの関わりに於いて、語りかけそして見る・聞く・知ることにも果敢に挑んでゆく。要するに、〈わたし〉が見えてくるその先に〈あなた〉がいた！ 「その逆も真なり」である。共鳴板のように互いが互いを撥ねかえし、そして交感し合う。このスツァモンダの‘危うさ’こそがセラピイの醍醐味と言えはしないか。してみれば、もはや相手が問題なのではない、自分が問題なのだとしてセラピストが真底自覚することが肝心となる。そこからどう相手に付き合っていくか、付き合わせていくかということの判断及び意志が動いてゆく！ セラピストもクライアントも双方が「己が己であるための道程」を歩むために・・・かくして互いが同伴者を得るのである。そして「非存在」が「存在」に包摂されてゆく。詩人が希求したように・・・付き合っている・付き合ってもらえているといった感触・手応えが感じられるということ。この互いに馴染みあう感覚、それこそが尊い。この情緒的側面を背景に退けてしまうことは極めてまずい。セラピイを面白くするものとは、まさにそれなのだから。それなしではサイコセラピイなるものは無惨であり、虚しくも腑抜けたもの、野暮で退屈なものになって終わるだろう。

詩人がこの詩のうちで呼びかける‘同伴者への思慕’を心理臨床の場でぜひ復活させたい。事実、我国の精神分析の未来を担う若手の心理臨床家の実践の場で私が‘隠れた同伴者’として在ると気づかされ、大いに心慰められた。改めて〈そうか、付き合わせていいんだわ！〉との安堵の思いがした。とことんめげない、たじろがない。精神分析家に不可欠な資質とは、まさにそれであろう。ここから教育分析(パーソナル・アナリシス)への希望が見えてきた。この樂觀を手離すまい。

(2016/10/25 記)

※註;岩崎学術出版社・季刊誌【学術通信】113 vol.37 no.2016 Early Spring 誌上に掲載。